PEOPLE 人の窓

みなさんの活躍紹介します

25年以上にわたってタイでの教育支援活動に携わる

ボランティアを通して得た人生の宝物

千歳ユネスコ協会 会長
伊藤（いとう） 博（ひろし） さん

千歳ユネスコ協会会長、北海道ユネスコ連絡協議会監事、千歳国際・友好都市交流協会理事を兼務。長くタイでの教育支援活動に携わり、「活動を通して視野が広がり、様々な人間関係ができてここまできた」と話す。

1997年のこと。タイの貧しい子どもを支援するNGO《メコン基金》に参加したのが、タイでの私の教育支援活動の始まりでした。

当時、タイでは義務教育が小学校までで、貧しくて中学校にすら行けない子が多かったんです。そのような子どもたちのために、タイ北部のノンカイ県で年間12,000円の奨学金を支給していました。ただ、中学校を卒業できたとしても、その後で働ける場所が少なかったので、アヒルを育てたり魚を養殖したりしていたのですが、なかなか定着せず苦労しました。

地方とバンコクの経済格差が大きかったこともあって、中にはバンコクまで出稼ぎに行く子もいました。特に女の子は働ける場所が限られていたし、八畳間に3～4人が暮らしているような生活でした。それでも話を聞いてみると、みんな明るいんですよね。「私が田舎に送るお金で弟を学校に行かせてあげられるんだ」とか、「親の暮らしを少し楽にできるんだ」とか、明るく話してくれるんです。みんな家族思いなんですよ。

当時は幼かった子たちも、中にはもう30歳を超えている子もいます。しかし今でも交流は続いていて、タイに行くと一緒にご飯を食べたり、一緒に寝泊まりしたり昔話をしたり。そういう関係が今まで続いてきたし、これからも続いていくと思います。ボランティアを通して得た、私の人生の宝物です。ボランティアで得られたものは、現地の子どもたちよりもむしろ私の方が多いと思っていますし、ボランティアができる自分は、本当に幸せだなと感じています。

タイには日本に憧れる子どもが多くいて、「日本人みたいになりたい」、「タイを日本のような国にしたい」と言うんです。そういう子たちのためにも、現地で日本語を教えたり、日本の文化を知ってもらえるような活動を今後も続けたいと思っています。

第6回

先生、教えて！

CHITOSE CITY HOSPITAL
市立千歳市民病院 地域医療連携課
☎(24)3000 内線8138

子どもの食物アレルギー

市立千歳市民病院
小児科診療科長 中本 哲

今月号は、来月号とセットで《子どもの食物アレルギー》について紹介します。

原因となる食物（アレルゲン）を食べたときに、身体が異物と判断して症状が出てしまうことを食物アレルギーといいます。

じんま疹、口や目の腫れ、喘息のような咳やゼイゼイという呼吸音、嘔吐や下痢といった胃腸の症状などが主な即時型アレルギー症状で、ほとんどは食後2時間以内に出ますが、4～6時間後に出ることもあります。体調の悪いときに食べたり、食後に運動や入浴することで症状が出ることもあります。

全身に強いアレルギー反応が同時に起こることをアナフィラキシーと呼びます。のどが腫れて呼吸困難になったり、血圧が急激に下がった状態（アナフィラキシーショック）は命に関わるため、緊急の対応が必要です。あらかじめ患者さんにはエピペンという家庭用注射を処方することがあります。

アレルゲンのうち卵、牛乳、小麦、エビ、カニ、そば、ピーナッツには表示義務がありますが、最近では、クルミアレルギーが増えており、表示義務が課せられることになりました。果物アレルギーも増加しており、シラカバなどの花粉症との関係が知られています。

また、牛乳や卵黄が嘔吐・下痢・血便など消化器症状だけを来すこともあります（新生児・乳児消化管アレルギー）。

外食やテイクアウトには表示義務がないので注意が必要です。次回は検査と治療についてお話しします。